

原子力・放射線利用における看護職への期待

——放射線防護の観点から——

Expected role of nursing profession: Viewpoint on radiation protection

横山 須美

Sumi YOKOYAMA

日本保健物理学会 学会連携担当／藤田保健衛生大学

Japan Health Physics Society / Fujita Health University

原子力・放射線利用は、これまで両輪のごとく進展を続けてきた。しかし、2011年の東京電力福島第一原子力発電所（福島原発）事故により、原子力分野は大きな痛手を負った。

日本保健物理学会では、福島原発事故の直後、自分たちの使命を全うすべく、いち早くホームページ上にサイトを立ち上げ、放射線やその健康影響、不安や疑問に答える活動を行った。

日本保健物理学会は、原子力や医療、理工学、産業での放射線利用分野において、放射線防護研究や技術開発を促進、得られた成果を社会や実務に反映、貢献できるよう活動を続けている。会員の専門分野は、環境放射線（能）、線量評価、放射線影響、医療被ばく、リスク評価・管理、放射線教育、防災・緊急時対応、原子力施設の安全管理・保全など、放射線防護・安全管理に関する研究や応用など、多岐にわたっている。

福島原発事故以降、私たちは、放射線や放射線影響について、わかりやすく、質問者に寄り添うことを心がけ、回答してきた。しかし、時々刻々と状況が変化中、生活スタイルや置かれている立場や状況は複雑化し、容易かつ正確に伝えることがいかに難しいかを痛感した。

そして、今もなお、福島原発事故は人々に大きな影響を与えている。自分たちが日常生活で受ける放射線量や内部被ばくとその線量評価法といったことに関心が集まる中、日本保健物理学会では、これらの関連情報の収集・分析を行い、広く社会に向けて、情報を発信するために臨時委員会を設立した。今後も、福島原発事故から学んだことを教訓として取り組むべき課題は多い。

看護職は、保健・医療・福祉の幅広い分野で人々に寄り添い、健康を守る役割を担っている。医療技術の目覚ましい発展の中、医療現場における看護職の期待はますます高まっている。一方、原子力・放射線利用分野においても、多くの人材を必要とする中、特に、放射線看護学を専門としている看護職への期待は大きい。本来もちうる医療の知識と経験、患者や地域住民との対話において培われた高いコミュニケーション能力、これに加え、放射線に関する知識をもち合わせている。放射線防護の専門家と手を携え、お互いの専門性を補い合うことができれば、医療の現場をはじめ、地域社会においても、放射線、放射線影響、そして放射線防護に関する知識を広く浸透させる大きな原動力となろう。

関連分野間の連携は、平時こそ重要である。何かが起こったときでは遅い。常日頃から情報交換を行い、新しい知識を蓄え、お互いを知り、高め合うことで、いざというときに大きな力を発揮することができるだろう。